

酷寒の冬が過ぎ春ともなれば、一応ホッとするところだが、依然として食事は変わらないので、道路わきに芽生えたタンポポ、アカザ、鬼アザミなど食べられそうな野草を摘みとって食べた。飯盒で茹でて、石で砕いた岩塩をふりかけて食べるのである。満腹感を味わうことは勿論だが、ビタミンの補給にもなったかも知れない。

作業は春から夏にかけて建築、鉄道路盤工事、農場作業と逐次変わっていった。やがて冬が近づくと、森林の伐採、炭坑作業、開発のための諸作業等直接雪に関係ないものへと変わっていった。

こうして春夏秋冬を三度繰り返した。その間、栄養失調で倒れた者、伝染病（パラチフス等）で死亡した者、凍傷で苦しんだ者、作業中に負傷した者等、枚挙にいとまがない。

昭和二十三年五月二十五日、舞鶴に上陸した時は、これでやっと故国へ帰ったんだと自分で自分に言い聞かせた。同時に日本の土を踏むことが出来なかった同志のことを思い、何と遺族に説明したらよいかに

迷った。

抑留中、今もなお、絶対に忘れることの出来ない一事を話す。それは作業大隊長と私が二人で営倉に入られたことである。理由は作業ノルマが達成されず、その責任を問われたものであった。営倉には灯りがなく、暖房の施設もない。外の薄あかりで五日間を過ごした。或る日の食事時、飯盒が特に重いので喜んで蓋を開けたら食糧ではなく石ころが入れられてあった。ソ連監視兵の単なるいたずらか、それとも中の糧食を盗みとったか、何れにしても冷酷極まりない仕わざである。永遠に脳裏を離れない人道上の問題である。

抑留、凍傷で潰えた爪が

三十年後再生

千葉県 兼平 正二

昭和二十年八月、私の所属部隊は中国の山海関より満州国新京に向かって移動していた。新京着後直ちに

「タコ壺」掘りに従事していたところ終戦となり、同月二十日、公主嶺に於いて武装解除を受けた。九月十五日、ソ連作業大隊として孫呉經由でソ連領に入る。ブラゴエシチュンスクでシベリア鉄道の有蓋貨車に乗り、十月十九日アバカン地区の収容所に着いた。この間食糧と水の不足になやまされ、まる三日間絶食のこともあり、蒸気機関車の水を呑んだりした。

このアバカン地区は「バイカル湖」の西方約千キロのシベリア鉄道クラスノヤルスク駅から更に約三百キロ南方の高地で、エニセイ河の上流地区になっている。収容所の建物は半地下式であり、ここで昭和二十二年の春まで過ごすことになったのである。以下印象に残っている労働作業について述べる。

(1) 水道管敷設工事と凍傷

水源地より工業団地へ送る水道管敷設のための穴掘り作業は、収容所へ到着後間もなく始められた。穴は深さ三メートル四十センチ、上部の幅八十センチ、底の幅七十センチ、長さ四メートルのもので、これを適当な間を置いて直線的に幾つも掘って行くのである。

穴と穴との間は水道管の太さだけ底の部分を開けておく。十一月月上旬で気温はすでに零下三十度を越していた。土の上部は三十センチから四十センチ位まで凍っているの、ツルハシを用い、それから下はエンピで掘る。穴が深くなるにつれ、エンピの柄を地上まで上げるのに大変であった。底に近くなると土を放り上げるのでなかなか捗らない。

作業は午後六時現在で零下四十度以下になると、その日は中止となる。午後六時が基準であるので、途中での気温の変化は問題にされない。

この作業期間中、手や足の指が凍傷になって指先を切断した者が大勢いた。私もその一人で、両足の親指先を切断した。この手術は日本兵の衛生兵が執刀したのである。この為約三か月間、労働は免除された。後復員してからの話になるが、爪も切断されたので、爾来三十年間、爪は生えなかった。従って親指に力が入らなくなり、人目にはわからない精神的な苦痛を忍んだのである。その後小さな爪がちょっぴり生え、五十歳を超えてはじめて伸び出して来た。しかし分厚くて

形も悪いので、爪切りに困った。今では剪定鋏を使って用を足している。

(2) 農耕作業

農耕と云ってもすべてが自活用のもので、ソフォーズとか、コルフォーズのような大きな農耕作業ではない。年が明けて春四月、収容所内の空地を利用して、試験的にビート（砂糖大根）作りが始められた。私は凍傷あがりであり、農学校出身ということもあって、この作業を受け持つことになった。

まず、種まきから始めた。ソ連兵の指示を受けながら雪解けの後をエンピで耕し、適当に播種したが、非常に乾燥していたので毎日の水かけは欠かさず丁寧にやった。しかし何日たっても発芽せず、ソ連兵の指導を受けた。結局日中の太陽熱で乾燥がはげしく、水かけが不十分であったのである。以後水量、回数を増やして、どうやら発芽を見ることが出来てはとした。その後は無肥料でも試験作は一応成功した。

その後本格的にということで、農業経験者の将校以下、下士官、兵の半病人が二十人選ばれて、収容所外

の川の近くの原野を耕した。小型トラクターを使用したので、個々の労働力は案外軽くて済んだ。

この土は積年の枯れ草、葉が腐食していることと、土が新しいということで施肥をしなくても結構いい野菜が出来た。

主なのは、ビートを初め、キャベツ、トマト、馬鈴薯等である。特にキャベツは大きなものが出来た。トマトは赤く実らないが、青いまま漬物として食用に供した。この地方の特色である。これらの農作物は大体五月から八月一杯位までである。

(3) その他

この自活用臨時農場に隣接して、一般ソ連人の農場と農家があった。農作業の度に一緒にになるので互いに顔なじみとなった。ある時作業の休憩時に、この農家の主婦に招かれて、乳製品をご馳走になったことがあつた。勿論野外である。私は貰ったものを口にしたが、あまりにも酸味が強いので、故意に吐き出してしまった。この主婦は大いに怒って、私を責めた。しかしお互いに真意が分かって、その場はおさまった。私は毒

入りを警戒しての仕業であったが、酸味は乳酸であったのである。その後何回かこのような機会があり、鶏卵を買ったり、更に子供に勉強を教えてくれ、などと頼まれたりした。しかしやがて農耕の季節も終り、二度とこのような機会はなかった。

一般ソ連人の気質の一端を味わったということ、今も思い出に残る話である。

シベリア抑留

仕事も食事もパーセント

熊本県 椎葉常喜

聞き手 本日はお忙しい中を聞きとり調査のためにご協力いただきました、まことにありがとうございます。

終戦後、あなたはシベリアに強制抑留され、しかも、酷寒の地で重労働に従事させられて、引揚げてこられました。この労苦を、再びこのようなことが起こらな

いように、後世のために、ただいまからとくとお話をお願いしたいと思うわけでございますので、どうぞよろしく。それは、どうぞ。

椎葉 私は椎葉でございます。ニュージトンにおいてソ連軍に対して無条件降伏し、そこから部隊一行はチチハルまで行軍しました。その間は、ソ連の兵隊に囲まれて、そしてチチハルに着いたのでございました。その間においては、戦争に負けたというような状況でございましたので、中国の方やら、それからソ連の方やらに、大変、何といいますが、恨まれるといいますが、そのような感じが、そのときはしてなりません。そして、ようようたどり着きましたのが元關東軍の戦車部隊の訓練所と聞いておりましたが、その部隊に集結いたしましたので、それから、ソ連に作業に行く体制をとったのではないかと私は思っております。

そのときに、シベリアに行くというようなことは全然思っておりませんでしたし、またソ連の兵隊さんたちも、そういうことは言ってもおりませんでした。そして、その元の戦車部隊においてシベリアに行く作業